総力戦体制下における信仰と戦争

——「日本基督教」を中心に——

川口 葉子

本発表は、アジア・太平洋戦争下における日本のプロテスタント・キリスト教において、「日本基督教」として現れたキリスト教の一形態について報告する。

二〇〇九年、日本プロテスタント宣教一五〇周年を迎え、七月に横浜で記念大会が開催された。「キリストにあつてひとつ——主イエスの証し人として——」というテーマのもと、日本キリスト教協議会（伝統派）、日本福音同盟（福音派）、日本リバイバル同盟（聖霊派）の三団体が協力して開催された。そこでは、一五〇年前の先人に感謝をするとともに、閉塞感のなかで福音宣教への使命を新たにすることを宣言した。一五〇周年とは、キリスト教界にとって、一致のあらわれであり、宣教の使命を再確認・再決起するものであった。

現在の「閉塞感」へと至る一五〇年の歴史の中で、戦時下のキリスト教は、外部とのかかわりが多いことが特異である。本発表では、そのかわりあいから創出された日本基督教に焦点をあて、それが教団の統制に重要な意味をもったことを明らかにする。

総力戦体制下において、宗教団体法を契機とした日本基督教団としての合同は、教団に所属する教師・信徒の信仰を掌握する意を内包するものであった。教団上層部は合同してひとつ

なつたことに価値を置き、さらに信仰もひとつとすることを模索し、日本基督教を提唱した。

教団は教師・信徒に対し、日本基督教をありうべき信仰として提示した。それは、戦争という社会的文脈を契機として提唱された、国体との整合性をはかるための内的論理であり、そのキリスト教的純粋性、回帰性がうたわれ、時代状況を超えた日本におけるキリスト教の見直しであることが志向された。そして、教団や文部省によって開催された教師錬成会などを通して日本基督教の信仰が受け入れられるにつれ、上層部、文部省によって信徒の掌握が容易となつていったのである。日本基督教によつて、教団として総力戦体制に組み込まれていったといえるだろう。

しかし、終戦によつて社会状況が変わると、日本基督教が時代状況的な制約を受けていたことが明らかとなり、すぐに消えていった。個人主義的性格を帯びた日本のキリスト教の歴史の中で、日本基督教は異質なものであり、国家及び社会的状況の制約のなかで現われた一つのキリスト教の形態であった。

日本の新宗教における国家観・天皇観と実践

——解脱会の事例から——

塚田 穂高

日本の新宗教において、ナシヨナリズムがどのような論理構造のもとに存在し、それに基いてどのような実践が行われている